

# 青森県東津軽郡平内町字茂浦字向田方言 における身体感覚を表すオノマトペ

渡辺修平

## はじめに

1. 調査対象地：青森県青森市より東へ26km、夏泊半島の北端に位置し、半農半漁で人口479名103戸の集落である。
2. 調査年月日：1991年8月25日 午前10時30分～11時45分
3. 話者：蠣崎ミネ 昭和3年1月1日生（63歳） その他66歳の女性を対象とした。
4. 調査者・調査場所：渡辺修平 話者の自宅
5. 調査方法・調査時の様子：質問法 83歳の男性も同席し、確認を得た。

当方言において身体感覚を表す場合には、「さっぱり」や「がたがた」のようなオノマトペを使用するよりは、「～メグ」という形あるいは他の方言形（形容詞等）で表現することが多い。そのため、あえてオノマトペを求めると、共通語形と一致する場合が多く見られた。以下は、その中でも当方言において特徴的と思われるものであるが、他の方言形での回答は「 」内に示し、オノマトペを使用した回答は [ ] 内に示した。

## I 全身の感覚

### 1-1. 快不快

「アンズマシ」 (さっぱりする)

共通語の「さっぱりする・気持ち良い・居心地が良い・落ち着く」等に対応する表現であり、広く快の感覚を表現する語形である。

### 1-2. 寒さ

稀 [ブルブル] フルッタ (ぶるぶる 震えた)  
「ウンジャメグ」 (風邪をひいた場合、寒気がする)

### 1-3. 熱さ

「ヌグダマツタ」 (酒を飲んだり、火にあたったりする場合、また風呂に入つて、身体が暖まった)

## II 皮膚の感覚

- 稀 [ピリ<sup>二</sup>ピリ<sup>一</sup>] (日焼け等の場合、ひりひり)  
「スラ<sup>二</sup>メ<sup>一</sup>グ・ヒリ<sup>二</sup>メ<sup>一</sup>グ」  
[ジタ<sup>二</sup>ジタ<sup>一</sup>] (汗をかいた場合、物体の表面が濡れている場合、べたべた)  
「ジダ<sup>二</sup>メ<sup>一</sup>グ・ジダ<sup>二</sup>ラ<sup>一</sup>トス」  
新「モサ<sup>二</sup>メ<sup>一</sup>グ・モサ<sup>二</sup>ラ<sup>一</sup>トス」(背中になにかが入った場合、むずむず・もぞもぞ)  
新 [ゴソ<sup>二</sup>ゴソ<sup>一</sup>] (空気が乾燥して肌の潤いが無い場合、かさかさ・がさがさ)  
「ゴソ<sup>二</sup>メ<sup>一</sup>グ」  
[ツル<sup>二</sup>ツル<sup>一</sup>] (温泉等に入った場合、すべすべ・つるつる)  
「ツル<sup>二</sup>メ<sup>一</sup>グ」  
[ズキ<sup>二</sup>ズキ<sup>一</sup>・ドキ<sup>二</sup>ドキ<sup>一</sup>] (切傷等の場合、ずきずき)  
「ズキ<sup>二</sup>メ<sup>一</sup>グ・ドキ<sup>二</sup>メ<sup>一</sup>グ」

[ドキドキ] および「ドキメグ」は傷が化膿した場合等、脈動が感じられる時に用いられ、[ズキズキ・ズキメグ] よりも程度が強い。

- [スラ<sup>二</sup>スラ<sup>一</sup>] (擦り傷、やけど等の場合、ひりひり)  
「スラ<sup>二</sup>メ<sup>一</sup>グ」  
[ドキドキ・スラ<sup>二</sup>スラ<sup>一</sup>] (できもの、しもやけの痛み共に併用する)  
「ドキメグ・スラ<sup>二</sup>メ<sup>一</sup>グ」

## III 頭部の感覚

### 3-1 頭

- [ズキ<sup>二</sup>ズキ<sup>一</sup>・ドキ<sup>二</sup>ドキ<sup>一</sup>] (発熱の場合、がんがん)  
「メ<sup>二</sup>メ<sup>一</sup>エス」 (熱で目眩がする場合、くらくら)  
[ギン<sup>二</sup>ギン<sup>一</sup>] (二日酔いの場合、ずきんずきん)

### 3-2 顔面

共通語の「かっか」「ぼっと」に対応する語形は無く、「メグセジャ」「ツラ アガクナッタジャ」(恥ずかしいよ/顔が赤くなったよ)のように表現する。

### 3-3 目

- [ズキ<sup>二</sup>ズキ<sup>一</sup>・モヤ<sup>二</sup>モヤ<sup>一</sup>] (テレビ等を見すぎて視力が一時的に弱った場合、ちかちか)  
「モヤ<sup>二</sup>メ<sup>一</sup>グ・モヤ<sup>二</sup>トス」

「エンブ<sup>テ</sup>エ」 「シ<sup>モ</sup>ル」 (煙い、煙くて目がしょぼしょぼする)  
[ゴ<sup>ロ</sup>ゴ<sup>ロ</sup>] (異物等が入った場合、ごろごろ)  
「ゴ<sup>ロ</sup>メ<sup>グ</sup>」

### 3-4 耳

[ギ<sup>ン</sup>] (大きな音を聞いた場合、きーん)  
「ガ<sup>バ</sup>ラ<sup>ト</sup>ス」 (飛行機に乗って気圧の変化を感じた場合、耳がじーんとする。)  
[グ<sup>ズ</sup>グ<sup>ズ</sup>] (中耳炎等で汁が出ているような場合、じくじく)  
「グ<sup>ズ</sup>メ<sup>グ</sup>」

### 3-5 鼻

[グ<sup>ズ</sup>グ<sup>ズ</sup>] (くしゃみが出そうな場合、むずむず)  
「グ<sup>ズ</sup>メ<sup>グ</sup>」 (風邪をひいている場合、ぐずぐずする)  
「モ<sup>チ</sup>ョ<sup>ク</sup>チャ<sup>イ</sup>」

共通語の「つーん」に対応する語形は無く、「カ<sup>レ</sup>シ<sup>テ</sup> ハ<sup>ナ</sup>サ キ<sup>テ</sup>マ<sup>ツ</sup>タ」(辛くて鼻にきてしまった)のように表現する。

### 3-6 口

(口全体)  
[ピ<sup>ロ</sup>ピ<sup>ロ</sup>] (納豆等を食べた場合、ねちゃねちゃ)

「梅干し、甘いもの」については該当する語形が無く、梅干しについて「ク<sup>ジ</sup> ス<sup>ツ</sup>ケ<sup>エ</sup>」(口が酸っぱい)が得られたのみである。また、甘いものについては「ク<sup>ジ</sup> オ<sup>ガ</sup>シ<sup>ク</sup>ナ<sup>ル</sup>」あるいは「ク<sup>ジ</sup> バ<sup>ガ</sup>ニ<sup>ナ</sup>ル」という回答であった。

(歯)

[ガ<sup>ク</sup>ガ<sup>ク</sup>] (寒くて歯の根が合わない場合、がちがち・かちかち)

共通語の「ずきずき・ちくちく」に対応する語形は無く、「ハ ヤメル」(歯が痛い)という回答であった。

(舌)

[ピ<sup>リ</sup>ピ<sup>リ</sup>] (辛いものを食べた場合、ひりひり)

「ピリメグ」  
[ジャラジャラ] (熱いものを食べた場合、舌がひりひりする)  
「ジャラメグ」

### 3-7 喉

[ガラガラ] (喉が渴いた場合、からから)  
「ガラメグ」  
[ヒラヒラ] (あくの強いものを食べたり、空気が汚れている場合、いが  
「ヒラメグ」 いが)  
[ゼーゼー] (息が苦しい場合、ぜえぜえ)

## IV 胴体の感覚

### 4-1 肩

[ゴロゴロ] (肩が凝った場合、こりこり)  
「ゴロメグ」

### 4-2 胸

[ドキドキ・ドギラン・ダグダグ] (恐ろしい目にあつた場合、どきどき、とくんと  
「ドギメグ」 くん)

[ドギラン] は、[ムネ ドギランテ シタジャ] (胸がどきどきしたよ) のように用いられる。[ドキドキ・ドギラン] は同じ程度を表し、[ダグダグ] が強い程度を表す。

共通語の「きゅつと」に対応する語形は無い。「カナシジャ」「ムネサ フタガル」(悲しいよ/胸がいっぱいになる)等の表現を用いる。

[ムカムカ] (悪いものを食べたような場合、むかむか)  
「ムカラメグ・ムカラトス」

### 4-3 腹

(空腹)

稀 [グーグ] (お腹が空いている場合、ぐうぐう、きゆるきゆる)

日常的には「ハラノ ムシ ナツテキタ」(男)「ハラデゴ ナツテキタ」(腹太鼓鳴ってきた・女)のように表現する。

(満腹)

稀 [ボンボン]

(食べすぎた場合等、ばんばん)

共通語の「たぶたぶ、ちゃぶちゃぶ」に対応する語形は無く、「ハラ クルシグナル」(腹が苦しくなる)のように表現する。

(腹下し)

[グルグル]

(下痢等をしている場合、ぐるぐる)

4-4 胃

[ニヤニヤ]

(胃が痛む場合、しくしく、きりきり)

4-5 尻

共通語の「むずむず、もぞもぞ」に対応する語形は無く、「居心地が悪い」という意味では「ケツアンベ ワリ」(尻の按配が悪い)のように表現する。

V 手足の感覚

(手)

[ブルブル]

(手が震える場合、ぶるぶる)

「ブルメグ」

(足)

「ガクメグ・ガラメグ」(足が疲れて震える場合、がくがく)

(その他)

[ヌルヌル・ヌラトス] (蛇、鰻等をつかんだと想定する場合、ぬるぬる)

[ゴンジラトス]

(柔らかいが、表面がやや固めな感じのものをつかんだ場合)

VI 関節(骨)の感覚

「ギグラトス」

(寝違えて首が痛い場合、ごきごき、ぐきぐき)

[ボキボキ]

(骨が折れそうな場合、ぼきぼき)

○ まとめ

当方言において、「ドキドキ・ガンガン」のようなオノマトベは日常的に高い頻度で使用されていないようである。むしろオノマトベを構成する一部の要素に「～メグ」あるいは「～(ラ)トス」(～とする)が接続した形で用いられるのが一般的であり、その中でも「ウヅジャメグ」(I. 1-2 寒さ)、「ゴヅラトス」(V. その他)のように、オノマトベ形へと回帰できないような表現も観察される。また同音節繰り返し型のオノマトベの多くは共通語と一致するものが多く、その意味では当方言に特徴的と思われる形は少ない。方言話者の内省によっても、あまりそのような言い方はしないとのことであった。

したがって身体感覚を表す場合には、「ハラデゴ ナツテキタ」(4-3. 空腹)のように文の形で表現するか、共通語と同じ語形を用いるか、あるいは一つのオノマトベで複数の場合を表現する方法が考えられる。例を挙げると、オノマトベではないが1-1. 快不快の「アズマシ」はいわゆる「心地よさ」を表す形容詞であるが、その意味する範囲は広く、生理的な心地よさのみではなく、精神的な快の感情をも表す語である。また、共通語で痛みを表す「ずきずき」に対応する当方言の「ドキドキ」は、傷、できものの痛みの他、発熱した場合の頭の痛みにも用いられているし、「ズキズキ」は「目がちかちかする」という場合にも用いられている。「ゴロゴロ」も同様に「目に異物が入った場合」の他に「肩の痛み」も表している。

このように、当方言においては身体感覚表現の種類は少ないが、それがカバーする意味場面に多様性が見られ、また「～メグ・～(ラ)トス」という形でほとんどの身体感覚のオノマトベを表現し得るといった特徴が指摘できよう。

最後に「～メグ」「～(ラ)トス」についてであるが、使用頻度としては「～メグ」の方が多いと思われる。例えば「ゴロメグ」とは言うが「ゴロ(ラ)トス」という語形はない。同様に「グズ(ラ)トス」、「ヒラ(ラ)トス」という語形もない。ただし、これらの相互関係についてはさらに詳しい調査が必要であろう。

(弘前学院大学)